

連続的に行ったコラージュ制作過程について

橘 玲子¹⁾・長谷川早苗¹⁾・運上 司子¹⁾・赤塚なつみ¹⁾
布施 直美²⁾・上野あゆみ²⁾・真壁あさみ³⁾

- 1) 新潟青陵大学大学院
- 2) 河渡病院
- 3) 新潟青陵大学

キーワード：コラージュ制作、体験過程、グループ

The Experience Process in Making Collage

Reiko TACHIBANA¹⁾, Sanae HASEGAWA¹⁾, Shisako UNJO¹⁾, Natumi AKATSUKA¹⁾
Naomi FUSE²⁾, Ayumi UENO²⁾, Asami MAKABE³⁾

- 1) Graduate school of Niigata Seiryō University
- 2) Kodo Mental Hospital
- 3) Niigata Seiryō University

Key words : collage making, experience process, group

1. はじめに

コラージュ療法は今、様々な領域で広く用いられている。この治療法の開発と位置づけ、理論的な背景については、森谷（2012）による「コラージュ療法実践の手引き その起源からアセスメントまで」に詳しく述べられている。この中で森谷はコラージュ作品の位置づけを図1に示したように、虚数軸（無意識・内界）を縦軸、実数軸（意識・行動）を横軸にとって、シュールレアリズム（理性を排除し無意識を重視）、コラージュ療法（意識と無意識の相補性）、作業療法（作業が中心であるが少し心も含む）、キュビズム：美術教育（無意識ではなく、造形の問題）がそれぞれどういうベクトルに位置づけられるかを提示している。なお、括弧の中の説明は平成25年7月20日の関東におけるコラージュ療法研修会における講演資料から転用したものである。森谷はここでコラージュ療法と他のコラージュ作品制作との違いについて、コラージュ療法の心理療法における意識と無意識の相補性を明確に位置づけた。実際にコラージュ制作を連続的に制作して、それらの作品を見てみると、ある意図を持って作品を作る場合には意識水準が高く、作品にはテーマとま

とまりがあきらかである一方で、好きなように楽しみながら制作すると何がテーマかわかりにくく、制作者も鑑賞者もまとまりを欠いて退行したような作品に見え、いわゆる無意識的な水準が動いていると予想される。

さらに、臨床的にコラージュ療法の利用を考えると、連続的に何枚かを作ることが望まれであろう。コラージュ作品による変化という視点から、心理的内界が理解され（変化しないということも含めて理解する）、意味づけられる。特に心理療法としては意識と無意識の関係の枠でクライアントの心理的变化を受け止め、読み取ることが治療者に要求されてくる。

本研究は作品の内容の変化を対象にするのではなく、回数を重ねていく中で作品の制作をどのように制作者が受けとめていくかについてまとめることにした。コラージュ療法は表現療法として非言語的であり、作品そのものを対象にしてテーマや意味付けが重要であることはいうまでもないが、大切なことはコラージュ作品で自己表現をしたいという意欲や動機がなければ作品が生まれない。そう考えると制作者の体験のプロセスをまず理解することが重要であると考えたからである。

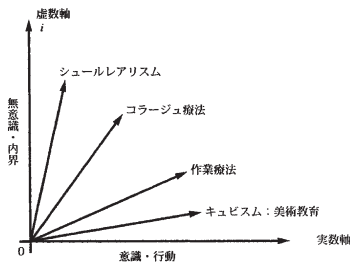


図2-10 複素数空間におけるコラージュ療法の位置づけ—美術、作業療法、芸術療法

図1 複素数空間におけるコラージュ療法の位置づけ—美術、作業療法、芸術療法 (森谷著 コラージュ療法実践の手引き 65pから引用)

2. 方法

実施期間 第1シリーズをH24年11月から12月、第2シリーズをH25年4月から5月の間に3回ずつ実施した。基本的には1回に作品を1枚作っていく。

対象者 臨床心理学専攻の大学院生、臨床心理士でコラージュの方法についてはある程度の知識を有しており、多くの対象者は作品を制作した経験者である(連続して作品を作ったことがある対象者は2名)。全参加者は29名であった。第1シリーズは19名の参加者で、3グループに分けられた。1グループは6から7名の構成で、基本的には3回の参加者は同じグループで進められた。今回の分析対象は第1シリーズに参加した19名である。

実施法 主として雑誌を切り抜いて作る方法であるが、企画者によって切り抜かれたものが入っているボックス法も頻度は少ないが利用された。小集団でメンバーが基本的には固定しており、そこに二人の企画者が参加している。企画者も作品制作に加わることもあった。

制作に1時間半、引き続いて約1時間、制作者はそれぞれの作品についての感想を語り合い、メンバーによるシェアリングが行われた。

制作に関する質問調査と自由記述

質問紙が作られ、シリーズの終わった時点で記入をしてもらった。

3. 結果

1) 作品の変化と意識との関係

連続してコラージュ作品を作っていくと、作品を変えたいという気持ちが生ずる場合がある。表1には作品を変えたいかどうかを調べたものであ

る。この結果、作品を変えたい者が3名、すこし変えたい者が9名で、変えたいと思わない人は7名であった。12名の制作者は作品を変えてみたいと思っていた。

表1 作品変化と満足感

作品を変えたい気持ち	人数	制作結果	人数	満足感(5段階評定) 5満足~1不満足
変えたい	3	変化した	2	5・4
		しない	1	2
少し変えたい	9	変化した	5	5・5・4・3・2
		少し	3	4・4・1
		しない	1	2
		変化した	3	5・4・3
思わない	7	変化した	3	5・4・3
		少し	3	5・5・4
		しない	1	3

また自分の作品が変化した、少し変化したと評価した者は16名に見られ、変えたいと思わない7名の人も6名が作品の変化を認めていた。興味深いことは作品が変わったと思った人の方が、5段階評定で満足感が12名に見られたことであった。このことからコラージュ制作において変えたいと思うか思わないかによって満足感が得られるというよりも、作品が変化したと自覚した制作者に満足感が得られたといえる。

図2 色々なものを作りたい気持ち

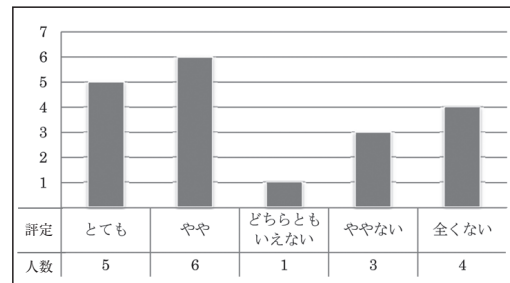


図3 自作を見て変えたい気持ち

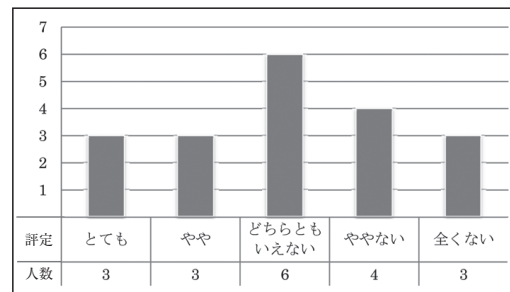


図4 他者作品を見て変えたい気持ち

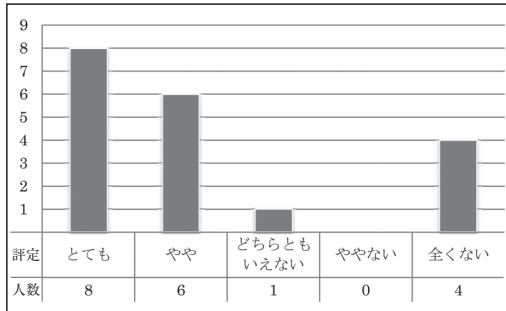


図5 他者から感想をもらって変えたい気持ち

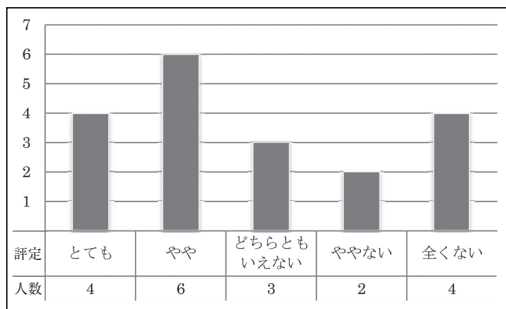


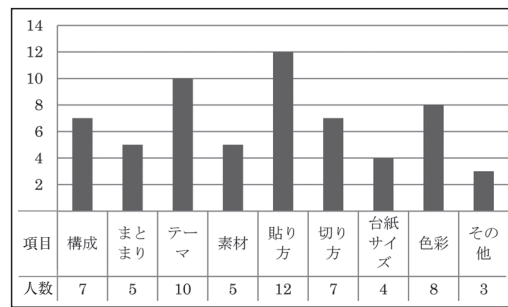
図2は「色々なものを作ってみてみたい気持ちについて」5段階で評定し、それぞれの評定点を示した人数である（以下の図も同様に示す）。

作品を変えたいと思う制作者は、図2に示したようにいろいろなものを作ってみてみたい人が11名で、作品の多様性を求めている者が多かった。しかし図3によると、自分の作品を見て変えたいという人は6名に過ぎず、どちらともいえないに6名、自分の作品を作って変えたいと思わないものが7名いたことである。作品表現への変化を求めているが、このことは図4によると、はっきりしない者を入れて14名の人たちに、他の人の作品を見て変えたいと思うことがわかった。どちらでもないというのは、はっきりと自分の制作過程から変えたいということではなかったので、他の作品と関連して制作態度が変わる可能性もあると判断した。このコラージュを変えたいという動機は集団で制作をしたことと関係があったのではないかと推測される。つまり自分の表現方法とは異なる作品に触発されて、いわば外界からの刺激によって作品変化への動機付けが生じたものであろう。他者の作品に触発されるだけでなく、図5には少なくとも半数の人たちがグループの中で感想をもらって満足を得たと報告している。しかし6名の人たちにはフィードバックとは関係なく自分の世界についての考えを持っていることもわかった。

2) 変化の内容

図6にはコラージュ作品が変化した内容を構成、まとまり、テーマ、素材、貼り方、切り方、台紙サイズ、色彩（台紙の色も含む、黒い台紙が良く使用されていた）、その他について制作者が複数回答で評価をしたものを示した。最も大きな変化は貼り方の12名で、続いてテーマの10名、色彩の8名、構成と切り方の7名であった。表1との関係で見ると、これらの内容について変わったと自覚できると、満足感が高くなるということである。

図6 変化した内容



3) 作品制作についての体験

コラージュ作品の制作過程にともなう「楽しさ」、「むつかしい」、「役に立つ」という体験についてまとめてみた。

図7 コラージュ制作の楽しさ

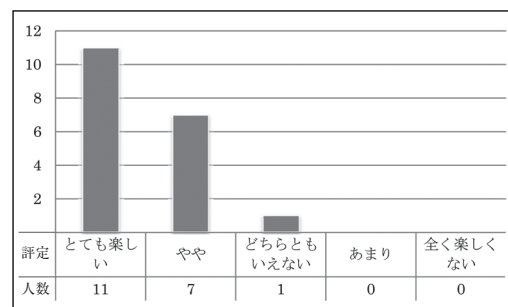


図8 コラージュ制作で遊ぶ

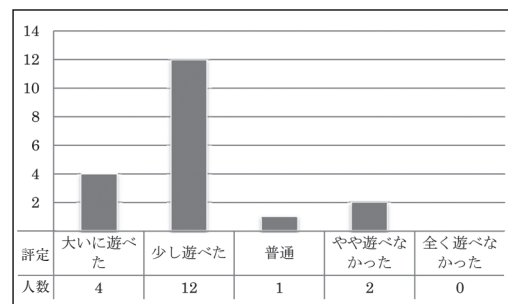


図9 グループ体験で遊ぶ

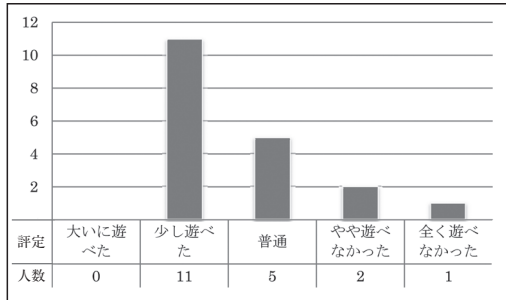


図11 役立つ理由（自由記述から）

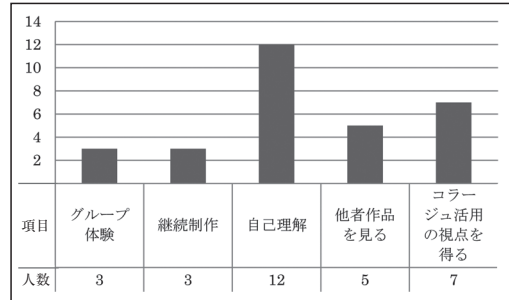


図10 楽しさの理由（自由記述から）

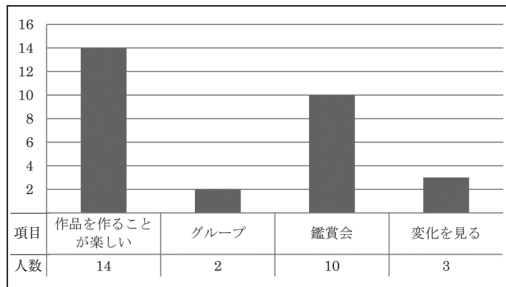
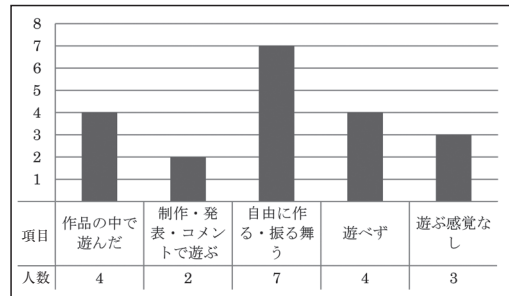


図12 遊びについて（自由記述から）



楽しさについては図7に示したように、とても楽しい（11名）、やや楽しい（7名）と18名が感じていた。コラージュ制作で遊ぶ感覚を持てたものは、図8から16名、図9からグループ体験で少し遊べたのが11名であった。この遊ぶ感覚は「大いに遊んだ」という評価ではなく、「少し遊べた」という評価であり、楽しむという感覚と遊ぶという感覚が微妙に違っていることに注目しておきたい。

さらに図10にはコラージュ作品を作っている楽しいという経験について、制作者の自由記述からその理由についてまとめたものである。作品制作そのこと自体を楽しんでいる人が多かったが、グループ体験での鑑賞会も10名の人が楽しさを感じていた。図11から、鑑賞会が楽しいという理由として、多くの制作者がコラージュ作成を自己理解として受け止めており、役に立ったという結果からも、図10の自己理解に関するものと推測すると、この自己理解に興味や関心、ある種の楽しさを体験しているものと考えられた。

なお、遊びについての自由記述をまとめた図12には自由に作る、いたずら、気ままに、わがままに振る舞って作れるという気分が7名と多かった。反面、遊べないとか遊ぶ感覚はないと述べた人が前者と同数の7名に見られた。この中には内面が過ぎたとか表出と抑制の葛藤を感じている制作者、他のメンバーにどう思われるかの緊張感や、表現されたイメージを言葉で表現する戸惑いも述べられていた。

図13 コラージュ制作の難しさ

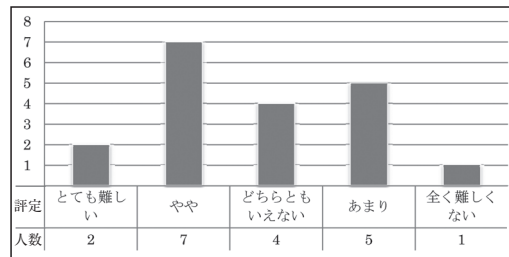


図14 難しさの理由（自由記述から）

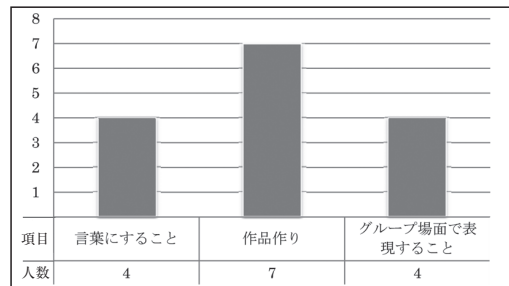
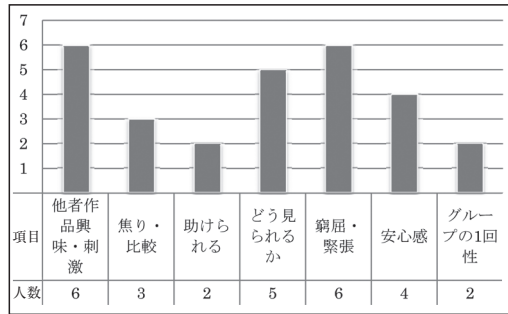
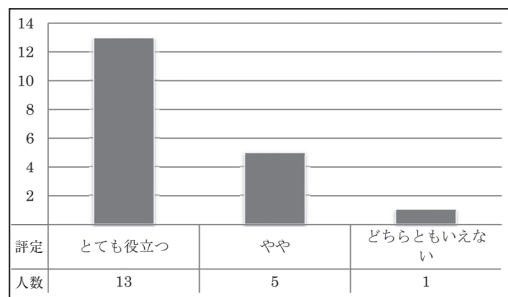


図15 グループ体験について（自由記述から）



難しさについては図13で難しい、やや難しいとする制作者の半数近い9名が指摘していた。図14, 15に見られたように、制作の際に戸惑いや緊張や力みを感じたり、変わらない事へのがっかり感があったようである。難しさの中身では作品を作る際の難しさもあるが、グループか否かを問わず、言語化に難しさを感じている者が8名見られた。コラージュのようにイメージを対象にする場合、言語化と曖昧な言語化できないものとの両者のバランスが大切で、言語化を求めすぎると曖昧さの持つ変化の可能性を排除してしまうし、逆にイメージだけで進むと言語化による意識化は希薄になって、自己理解への力を弱体化してしまう。このようなバランスの問題は集団で実施したり、鑑賞会を行う際に常に企画者やセラピストが知っておかなければならないことであろう。さらに図15ではグループの体験について他者の作品に興味と関心、刺激を受けるなど積極的なかわりを持った制作者と鑑賞会で感想をもらうことが良かったと思う人（図4）がいる反面、グループの中で窮屈・緊張感、どう見られるか、焦りや他者との比較について気にするという側面があり、複数回答であったがグループが緊張ももたらすことも明らかになった。この場合には楽しさや遊ぶ感覚とは逆の体験をする制作者がいるという点で、集団でのコラージュ作成には注意を要することが示唆された。

図16 コラージュ制作に役立つ



グループ体験がコラージュ制作に役立つと述べた制作者は図16 から、とても役立つ13名やや役立つが5名で、ほぼ全員が役に立ったという。自由記述によるグループ体験とは矛盾する結果ではあるが、臨床心理学を専門とする制作者であることを考えると、自己理解が進んだ（図11）と同時に、鑑賞会が役立った（図10）のは、コラージュ療法を学習というような知的関心、専門家としての理解ができたという点で肯定的に評価されたものであろう。このことから集団での制作は、対象者によっての問題が大きいことが示唆された。

4. 考察

1) コラージュ作成に伴う満足感

コラージュの制作過程で多くの参加者が楽しんでいったことは興味深い結果であった。また自分の作品が変わったと自覚した人たちに、特に満足感が高かったし、楽しんでいる感覚が生じていたことは、自己表現に関心があり、自己理解を目指して動機づけられていた参加者が多かったからと思われる。コラージュの表現を特に変えようとは思わない人たちにとっても、作品が変わることに満足感を伴って肯定的に受け止められていた。楽しむだけではなく作品を遊ぶ感覚で作れるのではないかと予想していたが、満足感や楽しむ方が遊ぶ感覚より強かった。いずれにしても、楽しんだり遊んだりできる感覚がコラージュ制作に伴っていたが、この体験の背景には制作者が臨床心理士やその養成課程の院生であったので、自己理解へ意欲が高く、制作への動機付けも高かったからであろう。対象者によっては満足感とか楽しみとか遊ぶ感覚などが意識されないこともありうる。なお、技法的な特徴として、他の非言語的な方法、例えば箱庭療法や絵画療法とは、満足感とか楽しむという体験についての比較検討をしていないので、コラージュに特化した特徴かどうかはわからない。森谷が箱庭療法からコラージュ療法の着想をしたことからすれば、表現方法に関する特徴の検討は必要であろう。

2) 作品の変化について

作品の変化は、図6に示したように作品の構成、まとめ、テーマ、素材、貼り方、切り方、台紙、色彩についてみることにした。作品の変化は①集団で実施したことから多様な作品の表現に触れた

こと、②グループで作品鑑賞によるシェアリングが行われたことの二つから、作品の変化に対して促進的に働いたことが考えられた。例えば貼り方で作品の変化が多く見られたが、重ね貼りに窓をつけて別の世界への通路を作ったり、薄い紙を幕のように掛けたり、手でちぎって貼ったり、台紙を複数の色彩の画用紙で作ったり、立体的に作ったり、台紙からはみ出して表現したり、多様な切り方と貼り方が見られた。これらの表現方法によって触発されて作品が変化することが多かったが、それは制作者に新しい心理的テーマを表現する方法でもあった。鑑賞会によって、役に立つと感じたり、新しいテーマに気づくこともあるし、意識しなかったことをフィードバックされてきょとんしたり、ぴったりしなかったり、様々なことを鑑賞会から影響を受けていた。しかし、重要なことはフィードバックで作品の制作に影響を受けることも見られたが、他者の作品から影響を受けることが多かったことである。コラージュの制作に取り組んだ臨床心理士たちは、多様な表現方法から新しいことを取り入れ、自己表現に挑戦し、そこに楽しさや満足感、時に遊びを体験することになったと考えられる。楽しさや遊び感覚は時に自由で、気ままに解放されて意識の世界を緩めることでより無意識的な方向で作品作りが始まったともいえる。

しかしこのような動きは、思わないものが表現されたり、不気味なものが現れたり、作品としてまとまりがつかなくなると困惑したり、退行するようなこともあった。このような作品の変化を見ることができたのは、連続的に作品を作っていたことから明らかになったもので、今回の分析はわずか3回の制作であってもこのような体験過程が読みとれたので、6回まで行った作品と体験過程について詳しい分析が行われる必要がある。

もうひとつ検討したい点はカッティングに伴うものである。ボックス法を使った制作者は非常に少なく、多くの参加者は雑誌から好きなパーツを探して切り取って、自分の作品のパーツにしていた。この必要なパーツをカッティングすることにすごい集中力が使われていたことが観察されている。箱庭療法から着想したコラージュ療法が、箱庭療法と異なる大きな点は、このカッティングにあるのではないかと推測された。カッティングから作品を構成する体験の違いはもう少し丁寧に検討される必要がある。今後の課題である。

なお、楽しみながら自己表現をするという体験は、コラージュによって自己理解を目指すという意識があったからと思われ、制作への動機付けとして意欲が高かった。楽しみながら無意識的なパーツを使用したり大胆に貼ってみたり、思い切った色彩を使ってみたりという多様な作業から、時に葛藤であったり、何が出るか怖かったり、コントロールしたりすることもあった。遊びすぎると退行がすすみすぎることもあり、楽しむくらいがほどよい意識と無意識のバランスがとれているといえるのかもしれない。内的に突き動かされるようなコントロールを超えてしまう心理的世界があらわになることもあろう。間藤（2007）の報告した事例には台紙から大きくはみ出し、迫力がある作品が紹介されている。ほどばしる無意識（あるいは衝動）ともいえ、心理療法としてどこまで枠から外れることを許すかは難しい判断が迫られる事に気がつく。意識と無意識のバランスはほどよい意識の統制下で行われる、つまりある枠の中で生じてくる相補性が必要になる。ほどよいバランスで森谷のいう意識と無意識との相補性が現れることが、心の健康さに通じることになるのだろうか。

3) 集団と制作過程について

コラージュ制作は比較的メンバーが変わらない小集団で行われ、1時間半の制作の後で、メンバーによるシェアリングが鑑賞会として行われた。ここではコラージュという漠然としたイメージ表現に言語化が課せられる。言語化することによって遊んだり楽しんだりする人もいるが、逆に言語化になじまず言葉がでてこなかったり、戸惑い苦しむ人もいた。非言語的なイメージの世界が「語る」世界になったときの変化は驚きや感動もあるし、無意識的な内容が作品に現れるときには、しばしば制作者と鑑賞者との間で作品への感想が異なることもあった。

鑑賞会について考えておきたいことは、漠然としたイメージの世界から語る世界へと変えてしまうことである。シェアリングによる言語化を数人の他者の中で行うことが、ある人たちにとっては緊張感にさらされてしまうことになった。つまり言語化は個人の内的な心理的变化を活性化する場合もあるし、逆に制限を与え窮屈にすることもあり得る。言語化が参加者に侵襲的となるか否かを予想することはかなり難しいこともわかった。このような体験はシェアリングの時に表現はされずに、自由記述の感想の

際に表現されていた。例えば、作品の変化にこだわり、変化できない自分がかかりしたり、変わるものがよいことのような意識になったり、他者の目を気にしたりなど、鑑賞会のシェアリングがこういった風潮を強化したのかもしれない。

言語化の問題は確かに危険性もあることを理解しなければならないが、しかしイメージを楽しんだり、遊ぶだけでは心理療法とはなり得ず、ある程度の言語化によって意識化することも自分の問題を焦点化することになる。シェアリングにはこのことを良く理解して観察しなければならない。今回の専門家集団におけるコラージュ制作と鑑賞会は山上(2008)による対人援助職へのアートセラピーで述べられていることに共通することが多かった。また何が生じてくるかも山上の指摘に納得できた。その中でも本研究は遊びとか楽しみという経験に焦点を与えたものである。それは長谷川(2011)の報告にあるようなデイケアにおける統合失調症を中心にしたメンバーと行った鑑賞会とは非常に異なっていた。病理のあるメンバーに対しては個人心理療法であっても集団であっても、メンバーの調子や病態をアセスメントしなければならないし、シェアリングも細心の注意を持って進めなければならないことは言うまでもない。統合失調症や摂食障害の人たちの作品は変化がきわめて少ないことを思い浮かべると、改めてそれが何を表すのかを考えてみたい。19名の臨床心理士たちには、作品が変わることに体験も同時に変化していくことを考えると、変わらないし変えないということに病理の重さに関係してくるかもしれない。その意味で健康な人たちのコラージュ制作について知っておくことは、意味があることを改めて感じたことであった。

5. まとめ

集団で行った臨床心理士のコラージュ制作について、以下のようにまとめた。

- ① 制作者は自分の作品の変化に気がついたとき満足感を得ている。それは楽しい感じとか場合によっては退行による遊ぶ感じでもあった。
- ② 集団法は自分の作品から表現に変化を求めるといっても、他者の作品から触発されて変化がもたらされることが多い。作品の表現方法で変化を指摘されることが多かったが、しかしその変化の内容はテーマや色彩など制作者の内的

世界への通路とも考えられる。

- ③ 集団法でのシェアリング体験は、作品を語ることでより自己理解が進む側面もある。しかしその反面、言語化の際の戸惑いと集団から評価を気にする面もあった。

謝辞

本研究は平成25年度新潟青陵大学学内共同研究費（研究代表者 長谷川早苗）の助成を受けて行われたものです。

参考文献

- 長谷川早苗（2011）：『統合失調症事例の作品変化～コラージュグループ鑑賞会の意義を踏まえて～』コラージュ療法学研究第2号第1号 pp3-15
- 間藤 侑（2007）：『三次元的コラージュとの「遭遇」その1～ヴァルネラブルなクライアントとの物語世界～』新潟青陵大学大学院臨床心理学研究第1号 pp 13-20
- 森谷寛之（2012）：『コラージュ療法実践の手引き その起源からアセスメントまで』 金剛出版
- 山上栄子・山根 路（2008）：『対人援助のためのアートセラピー』 誠信書房